昭和53年度 **臨床相談技術共同開発事業報告書 (3)**

就園前障害幼児の指導技術を通して

—その3— 母親のニードおよび態度の変化

「分担研究者」
家庭生活研究会　宮崎徳子・酒井政子
村瀬和子・植村規代
奥井房子・小倉治子

〔前　論〕

本研究は2部からなる。第1は昨年度報告におけることばの遅れを主訴の来所幼児の母親のニード項目を構造的に明確にするために因子分析を行ない，その結果の考察を通じて今後のステップへの示唆を得ることである。

第2は，上記因子分析結果を一部採用し，昨年度に見出された母親のニードが相談過程を通じてどのような変化をするかをとらえ，さらに通常のカウンセリング研究で行なわれるような母親の態度変化や洞察についての示唆を得ようとするものである。

第Ⅰ部　母親のニードの因子分析

前年度の報告においては，相談所がクライエントの全生活の投影の場であるとの本研究の一貫した仮説のもとに，来所障害児の母親のニードをできるだけ構造的かつ網羅的にとらえた。ここで対象となったのは，ことばの遅れを主訴として来所した就園前の幼児の母親27名であり，その継続6カ月以上の面接を通じて担当者が，あらかじめ予備研究で設定されたニード一覧表〔第Ⅱ部結果の第14表〕に基づいて評定を行ったものである。

前報告においてはニードの各項目に関する分析およびあらかじめ仮説された理論枠に基づく分析を行なったので，この第Ⅰ部では，因子分析によって前年度報告を再吟味することにした。

1　目　的

(1)　ニードをあらわす数多い調査項目をより少ないいくつかのグループにまとめる。

(2)　ニードの概念的な分類に，因子分析の結果がどのくらい一致するかを確かめる。不一致が生じた場合には，その原因を考察し，探索的な検討をする。

2　方　法

調査項目：

前述した母親のニード項目。因子分析に適さない回答のされ方をしたもの（すべての被験者が「はい」と答えたもの，「いいえ」と答えたもの）を除いた64項目。

被験者：

前述した母親27例。

分析の方法：

64項目間の相関行列をもとにして，まず主因子法を行なった。この結果から適当な因子数を定め，次にバリマックス法により解を求めた。

3　結　果

主因子法における固有値，寄与率，累積寄与率は参考付表に示されている。この結果は，調査項目が，かなり多因子的であることを示している。ここから，母親のニードが数少ない主要な傾向からなるというよりもむしろ多面的なものであることがわかる。

参考付表からは固有値の著しい減少がみられないが，相関行列をもとにした項目のグルーピングを通じて，因子数は13個に限るのがふさわしいと考えられた。バリマックス法は固有値が2.0以上の因子，累積寄与率78.4%までの13個の因子で行なわれた。この結果をすべて表にするのは煩雑なため，各因子毎に負荷量の大きい項目を

参考付表

因子 FACTOR	固有値 EIGENVALUE	寄与率 PCT OF VAR	累積寄与率 CUM PCT
1	7.39951	11.6	11.6
2	6.18390	9.7	21.2
3	5.15789	8.1	29.3
4	4.50492	7.0	36.3
5	3.93159	6.1	42.5
6	3.63946	5.7	48.2
7	3.55230	5.6	53.7
8	3.24627	5.1	58.8
9	3.10043	4.8	63.6
10	2.70636	4.2	67.8
11	2.48194	3.9	71.7
12	2.16343	3.4	75.1
13	2.11101	3.3	78.4
14	1.88179	2.9	81.3
15	1.78739	2.8	84.1
16	1.58185	2.5	86.6
17	1.49907	2.3	89.0
18	1.39710	2.2	91.1
19	1.13751	1.8	92.9
20	1.09906	1.7	94.6
21	0.93744	1.5	96.1
22	0.70756	1.1	97.2
23	0.61453	1.0	98.2
24	0.54648	0.9	99.0
25	0.38426	0.6	99.6
26	0.24605	0.4	100.0
27	0.00001	0.0	100.0
28	0.00001	0.0	100.0
29	0.00001	0.0	100.0
30	0.00001	0.0	100.0
31	0.00000	0.0	100.0

まとめた。その結果は以下に，各因子の解釈のところで示す。

全体として各因子では，概念的には2つ以上のカテゴリーにある項目の負荷量が高くなっている。必ずしも概念的カテゴリーと対応していないのである。またある因子の負荷量が高いいくつかの項目間での共通した性質を見い出すことがかなりむずかしくなっている。この理由は，1つには被験者数が少なく，信頼のおける結果が出なかったからであろうが，もう1つには，今までの概念的カテゴリーでは分類できていなかった母親のニードのまとまりがあるからであろう。前者に問題がなかったと仮定して解釈をおしすすめると，潜在していた母親のニードのカテゴリーの性質について推測できる。なお以下第1～13表においてはじめについているA～Gは前論において示した項目の理論仮説によるカテゴリーをあらわす。（本論では第14表参照）

第1表　第1因子

No.		項目名	因子負荷量
1	E②	どこへ行って診てもらえばいいか	0.78791
2	E③	適切な医療機関を受診のために紹介して欲しい	0.77754
3	F②	その他の通園施設の情報が知りたい	0.62892
4	D③	地域の障害児を持つ仲間と連帯したい	0.61208
5	E①	受診するのがこわい	0.53760
6	E②	受診が必要だろうか	0.51263
7	A②	子どもの今後の発達の見通しが知りたい	−0.51040
8	A②	子どもの発達状態の現状を知りたい	0.45031
9	A②	子どもの発達の遅れ（ことばの遅れ）の原因を知りたい	0.41564

解釈：1，2，3，5，6は他機関との関係，特に医療機関での受診に関するものである。7，8，9は子どもの発達について知りたいということである。4は少し異質の項目であるが，他のほとんどの項目に共通して考えられる不安（これは特に5で明らかであるが）を思えば，ここであらわれたのも不思議ではない。

因子名：診断，指導上の現実的ニード（他機関特に医療機関での受診，それを通じてこわいながらも子どもの発達の現状を知りたい気持）

第2表　第2因子

No.		項目名	因子負荷量
1	A②	プレイルームでの子どもが見たい	0.83218
2	A②	プレイルームでの子どもの様子が知りたい	0.80707
3	D②	適当な遊び友だちがいないがどうしたらいいか	0.75127
4	A②	診断して欲しい　普通と違うのではないか	0.69665
5	D①	適当な遊び友だちがいなくて悩む	0.57732
6	C②	自分以外の家族に会って欲しい	0.51530
7	F③	園へ紹介してほしい	0.47163

解釈：1，2，3，5は子どもの遊びに関する項目である。1，2，4は子どもの現状を明らかにしたいという項目である。6，7の意味は明確でない。

因子名：子どもの現状，特に遊びが悩みでそれについての対処

第3表　第3因子

No.		項目名	因子負荷量
1	A①	発達の遅れ（ことばの遅れ）に対する不安	−0.79935
2	F①	園に対しての不満	0.68313
3	C③	家庭に来て解決してほしい	0.59451
4	F②	幼稚園・保育園の情報が知りたい	−0.58493
5	F②	園と子どものことについてどう話し合ったらいいか	0.51598
6	E②	他の機関への通所について適切かどうか知りたい	0.51083
7	F②	園と子どものことについて話し合ってほしい	0.50564

解釈：2，4，5，7は幼稚園に関する項目である。6は園ではないが他機関に関するという点で類似している。1がマイナスになっているのは，園について気にかかっている母親が，ことばの遅れの不安はむしろ既に前提として，自覚的に表出されないといえる。4のマイナスも同様に解される。3の意味は明確ではないが，以上のことを考えると，これは子どもの幼稚園就園後に起こってくるような悩みの因子といえる。

因子名：ある程度幼稚園・保育園について情報を得，かつ就園前後に起こってくる不安・不満

第4表　第4因子

No.		項目名	因子負荷量
1	G②	通所日数を増してほしい	0.84753
2	F②	園の選択について意見を聞かせてほしい	−0.76507
3	A②	客観的資料（知能テスト・発達テスト）がほしい	0.63145
4	F②	教育制度に関して知りたい	0.56721
5	G①	（マスコミの）情報に接してショックを受け，不安になる	0.50121
6	G②	情報に接したがどういう意味かはっきりさせたい	0.48722

解釈：3，4，5，6は知的な情報に関する項目である。2も意見を求める点で情報に関するものであるが，マイナスになっている点に注意を要する。1も単なる要求であることを考慮すると，この因子は自分自身や子どもと直接かかわりのあるところで起きてくる深い感情というよりも，むしろ制度的次元での現実的なニードのまとまりと考えられる。

因子名：制度的・現実的レベルのニード。

第5表　第5因子

No.		項目名	因子負荷量
1	D①	近所の子どもとうまく遊べないので悩む	−0.67385
2	D①	適当な遊び友だちがなくて悩む	0.62475
3	F②	教育制度に関して知りたい	0.59159
4	A①	将来の不安	0.56434
5	D②	近所の子どもとうまく遊べるようにするにはどうしたらいいか	−0.55470
6	D①	適切な遊び場所がなくて悩む	0.44189
7	A②	プレイルームでの子どもの様子が知りたい	0.41306

解釈：1，2，5，6，7は子どもの遊びに関する項目である。3，4はあまり明確でないが，先行きに関する懸念といえる。この因子は，子どもにとって適切な環境がなく，子どもにふさわしい密接な社会環境が今後得られるかが気がかりだという気持ちといえるだろう。

因子名：子どもにふさわしい遊びの環境・対人関係へのニード。

第6表　第6因子

No.		項目名	因子負荷量
1	A①	子どもの行動の意味が理解できないいらだち	0.78458
2	F③	園へ紹介してほしい	−0.58187
3	G②	母親のカウンセリングを受けたい	−0.56578
4	B①	子どもの状態・行動に対するいらだち，腹立ち，怒り	0.52713
5	A①	子どもの変化・成長をなかなか認められない焦り	0.42570

解釈：1，4，5は子どものことについて心配する時に起こってくるいらだち，焦り，怒りのような感情をあらわす項目である。2，3共にこのような感情というよりも，もう少し静かな欲求を示し，ともにマイナスになっているのは注意を要する。この因子は園への紹介やカウンセリングを受けることなどに考えが及ばない，身動きのとれない状態で，やり場のない腹立ち，イライラが起こるという母親の気持ちであろう。

因子名：子どのことについて，いらだち，焦り，就園先・進むべき方向も定まらない気持ち。

第7表　第7因子

No.		項　目　名	因子負荷量
1	F①	その他の通園施設への入園に対する不安	−0.84437
2	A②	子どもの気持ちや行動の意味が理解できないので知りたい	0.55543
3	B②	こういう場合の子どもへの対処の仕方を知りたい	0.55016
4	F②	園と子どものことについて，どう話し合ったらいいか	−0.52180
5	F②	その他の通園施設の情報が知りたい	−0.50504
6	A②	子どもの発達状態について現状を知りたい	0.47355
7	C②	家族の問題を処理するにはどうしたらいいか	0.42577

解釈：1，4，5は園や施設に関する項目である。2，3，6は子どもへの接し方，理解に関する項目である。7は上の両者とも異質な項目である。2，3，6のように子どもの現状で悩んでいる一方で，1，4，5のように園のことは問題になっていない，という気持ちは，子どもの通園を現実的に考えるに至っていない段階での，子どもの理解と対処の仕方を知りたい気持ちといえるだろう。

因子名：子どもは通園レベルになっておらずもっぱら子どものことが知りたいという気持ち。

第8表　第8因子

No.		項　目　名	因子負荷量
1	A①	他児への羨語	0.77821
2	F①	福祉金・愛の手帳などの受益に対する抵抗・不満	0.73094
3	A①	（普通の子と違う）異質性への恐れ	0.59735
4	G①	（マスコミの）情報に接してショックを受け不安になる	0.41243
5	F②	福祉金・愛の手帳などの受益について知りたい	0.40182

解釈：1，3は子どもに関する項目で，他との比較において特に起こってくる感情を表わしている。2，5は福祉金・愛の手帳のような特別な制度に関する項目である。4は明確ではないが，2，5に近い。この因子は，子どもが他と異なる，特別なのだという認知とそれに対する否定的な感情を表わしていると言える。

因子名：子どもが特殊だという認知と，それに関して起きてくる否定的感情。

第9表　第9因子

No.		項　目　名	因子負荷量
1	G②	気が楽になる，気が晴れる，一人でいると気が重い	0.80929
2	E②	受診が必要だろうか	0.51369
3	D①	子どもの障害について話し合える人がいなくて悩む	0.46448
4	D③	地域の障害児を持つ仲間と連帯したい	0.42346

解釈：1，3，4は気持ちを理解してくれる他者がいない，欲しい，いるので気が楽になるという点で一致している。2ははっきりしないが，かなり訴える場を求めていると考えれば，共通している。

因子名：理解し合える他者を求める気持ち。

第10因子以下については解釈を省略し，表のみをかかげる。

第10表　第10因子

No.		項　目　名	因子負荷量
1	F①	教育制度への不満	−0.86652
2	G②	話すところはここしかない	−0.75940

第11表　第11因子

No.		項　目　名	因子負荷量
1	B①	順調に育てられなかったのは，自分の育て方のせいか	0.74134
2	E①	医師不信，行っても仕方ない	−0.67116
3	A②	子どもの発達の遅れ(ことばの遅れ)の原因を知りたい	0.59697
4	E②	他機関への通所について，適切かどうか知りたい	−0.55810
5	B①	子どもの状態・行動に対するいら立ち，腹立ち，怒り	0.44984
6	B①	適切に対応できない自分の性格の悩み	0.40660

第12表　第12因子

No.		項　目　名	因子負荷量
1	B①	子どもに適切に接することができない自分の嫌悪感	0.76208
2	C①	同胞との関係に悩む	0.69696
3	G②	情報に接したが，どういう意味かはっきりさせたい	0.68893
4	C②	家族の問題を処理するにはどうしたらよいか	0.51470
5	G②	本を貸して欲しい	−0.41626

第13表　第13因子

No.		項　目　名	因子負荷量
1	B①	状況として接する時間がとれない悩み	0.69841
2	E③	他の通所機関を紹介してほしい	0.56954
3	G②	本を貸してほしい	−0.47134
4	F②	幼稚園・保育園の情報が知りたい	0.46939
5	B①	子どもにどう接したらよいのか分からない，混乱してしまう	−0.42704

4　要約と考察

この研究の被験者数が少なかったという問題等のために，結果が不明確になっていると考えられるが，ひとまず結果をまとめると，調査項目はかなり数の多い（ここでは13個の）因子としてまとまった。ニードには数少ない共通したまとまりがあるというより，多次元的であるといえる。

ニードの理論仮説による分類と，因子分析の結果は必ずしも一致していない。1つの因子で，2つかそれ以上のカテゴリーに入っていた項目の負荷量が大きくなっていることが多い。一方極端なばらつきがあるわけでもなく，したがって今後の検討を待たなければならないところが多いが，現段階で示唆されるいくつかの点はあげることができるる。第1に，例えば，知的で表面的なニードのまとまり（第4因子）から，強い怒りのような否定的感情の色相の強いニードのまとまり(第6因子)まで，感情の激しさの程度が因子としてまとまっているのではないかと思われる。

第2に，上記と無関係ではないが，第7因子のように，子どもの発達，適応のレベルに応じた母親のニードのまとまりが因子としてあらわれているものと考えられる。第7因子に集まっている項目をみると，子どもを理解できないで困っている母親は，まだ園や施設について現実的に考えるに至らないことがわかる。つまり，これらの母親の子どもは，かなり発達が遅く，問題も大きく，幼稚園レベルに至っておらず，母親は園や施設のことより，母親と子どもの間でのことが心配になっているのであろう。第3因子は，幼稚園レベルでの問題におけるニードがまとまっているという意味で，もう少し進んだ段階でのまとまりといえるかもしれない。

要約すると，それぞれの因子は，主に，①ニードの深さ，強さの程度によってまとまりをなしているように思われる。②子どもの発達や適応の程度によってまとまりをなしているように思われる。③その他にも個々の事例によって，さらに検討すべき点が生じてくると思われる。その一部は，次の第Ⅱ部において，若干明らかにされるであろう。

第Ⅱ部　母親のニードおよび態度の変化

1　目　的

前年度にひきつづき，障害幼児のグループアプローチにおける母親のニードとそれへの対応を明確にするため，前年度に得られたニード分類，その他を基準にし，処遇過程における母親への質問紙および担当者の評定を行ない，それに基づいて母親のニードおよび態度の変化のプロセスを吟味する。

2　方　法

母親のニードおよび関連する事項について相談期間中における変化を把握するために，次の4つの方法を用いた。

A-1…前年度に得られたニード項目のチェックリスト〔結果の第14表参照〕。評定は母親の面接者により行なわれた。（9月，11月，2月実施。）

A-2…A-1に対応して母親自身が回答できるようなチェックリスト〔第15表〕を作成。（ただし該当の少ない項目は除外して用いた。）（9月，11月，2月実施。）

B-1…母親のカウンセリング過程を評定する研究において一般に用いられているものを独自に作成。（文教大学において行なわれている研究と同一のものとした。）〔第17表—①〕（月1回実施。）

B-2…同上。母親用チェックリスト。〔第17表—②〕（9月，11月，2月実施。）

B-1，B-2は，本研究の中核的主旨からすれば補足的であるが，従来形式の研究との関連を一応把握しておく必要があると思われた。

A-1，A-2の評定に際しては，母親の発言に準拠することとし，全体的に問題意識が推定されても，それが具体的に会話の中で語られなければ評定点は与えないこととした。ただし項目に示されたようなことばで語られる必要はなく，具体的な会話の内容がその項目の表現に近いものと解釈されれば評定点に加えることとした。

3 結　果

(1) 母親の初回チェック時（9月）における母親自身によるチェック結果（A-2）および面接者による評定結果（A-1）を，各項目に対するプラス該当数によって比較表示すると第14表左2列（第1・2列）のようになる。なお，昨年度は年間を通じてのニード評定を行なったので，それと比較対照させる意味でA-1については面接者の3回にわたるチェックのうち1回以上該当をみたものを〔該当あり〕とみなして表示したものが表の第3列（A-1′）である。（治療中断などでケース数は減っている。）母親のニードの実態を示すものとして昨年度の資料によって昨年報告した結果がほぼ裏付けられている。「将来の不安」「同胞関係に悩む」「遊び場所」その他若干のニュアンスの差はみられるものの，ケースの個別的事情による差の範囲内であると思われる。

また初回チェック時の該当（A-1）と全期間を通じての該当（A-1′）の差も，第Ⅰ部に記した時期による違いを裏付けていると思われる。（特に就園に対する現実的問題など。）その他「家族関係の悩み」が初期にあまりチェックされていないことなど，まだ細かに吟味しなければならない問題はあるが，例数も少ないので，単純集計の考察はこの程度にとどめておく。

ちなみに，A-1，A-2すなわち面接者の評定と母親自身による評定の一致度は十分高いとはいえないが，全体として半数近くの項目において一致を示しており，従っ

第14表

		プラス該当数 9月 母親 A-2 (N=9)	9月 面接者 A-1 (N=10)	年間 面接者 A-1′ (N=6)	母親自身 上昇	変動	不変	下降	面接者 上昇	変動	不変	下降
A. 子どもの現実状況の把握・理解の問題												
①	発達の遅れ（ことばの遅れ）に対する不安	9	9	6	1	0	2	3	0	0	2	4
	子どもの行動の意味が理解できないいらだち	8	7	5	1	0	3	2	0	1	3	2
	(普通の子と違う)異常性に対するおそれ		4	4					0	1	2	3
	子どもの変化・成長をなかなか認められない焦り	8	2	2	0	0	5	1	1	1	4	0
	他児への羨望		1	2					1	1	1	0
	将来の不安	9	5	6	1	0	4	1	0	2	1	3
② a	子どもの発達状態について現状を知りたい	9	4	5	1	0	0	5	0	1	1	4
	子どもの気持ちや行動の意味が理解できないので知りたい	7	7	5	0	1	2	3	0	1	2	3
	診断してほしい，普通と違うのではないか		1	1					0	0	5	1
	子どもの発達の遅れ（ことばの遅れ）の原因を知りたい	7	5	4	1	0	2	3	1	0	3	2
	子どもの今後の発達の見通しが知りたい	9	6	6	0	0	3	3	0	2	1	3
	プレイルームでの子どもの様子が知りたい		0	0					0	0	6	0
b	客観的資料(知能テスト・発達テスト)が欲しい		1	1					0	0	5	1
	プレイルームでの子どもが見たい		0	0					0	0	6	0
B. 子どもに対する接し方の問題												
①	子どもにどう接したらよいのかわからない，混乱してしまう	8	5	5	0	1	3	2	1	1	2	2
	子どもの状態・行動に対するいらだち・腹立ち・怒り	8	7	5	0	0	4	2	1	0	3	2
	子どもに適切に接することができない自分への嫌悪感	6	3	3	2	0	2	2	0	0	3	3
	子どもを順調に育てられなかったのは自分の育て方のせいか	7	3	5	1	0	4	1	1	1	2	2
	状況として接する時間がとれない悩み		1	2					0	0	4	2

②	この子に合った接し方を知りたい（自分の接し方でよいのだろうか）	9	5	6	0	2	3	1	1	0	1	4
	こういう場合の子どもへの対処の仕方を知りたい（具体的な問題行動・異常行動に関して）		6	5					0	0	3	3
C. 家族関係の問題												
①	父親の非協力に悩む	5	0	2	1	1	3	1	2	0	4	0
	同胞との関係に悩む	6	1	0	0	2	3	1	0	0	6	0
	その他の家族関係に悩む（姑，その他）		2	3					1	0	3	2
②a	家族の問題を処理するにはどうしたらいいか		0	0					0	0	6	0
b	自分以外の家族に会ってほしい		0	0					0	0	6	0
③	家庭に来て解決してほしい		0	0					0	0	6	0
D. 近隣社会との関係の問題												
①	近所の人の無理解，好奇の目などに悩む	6	4	4	0	0	6	0	1	1	2	2
	近所の子とうまく遊べないので悩む	9	8	5	1	1	3	1	0	1	3	2
	適切な遊び場所がなくて悩む		3	2					0	0	4	2
	適当な遊び友だちがいなくて悩む		5	4					0	0	3	3
	子どもの障害について，話し合える人がなくて悩む		3	3					0	0	4	2
②	障害を理解してもらうためにはどうしたらいいか		4	4					0	0	2	4
	近所の子とうまく遊べるようにするにはどうしたらいいか		4	5					1	1	1	3
	適切な遊び場所がないがどうしたらいいか		0	0					0	0	6	0
	適切な遊び友だちがいないがどうしたらいいか		1	1					0	0	5	1
③	地域の障害児を持つ仲間と連帯したい		1	1					0	0	6	0
E. 医療機関・その他の通所機関との関係の問題												
①	受診するのがこわい		0	0					0	0	6	0
	医師不信・行っても仕方ない		1	2					0	2	4	0
②	受診が必要だろうか		1	0					0	0	6	0
	どこへ行って診てもらえばいいか		2	1					0	0	5	1
	他の機関への通所について適切かどうか知りたい		2	2					1	0	4	1
③	適切な医療機関を受診のために紹介してほしい		1	0					0	0	6	0
	他の通所機関へ紹介してほしい		2	1					0	0	5	1
F. 教育・福祉制度についての問題												
①	教育制度に対する不満	8	1	2	1	2	3	0	0	1	4	1
	幼稚園・保育園への入園に対する不安	9	7	4	0	2	2	1	0	0	6	0
	その他の通園施設への入園に対する不安		0	2					0	2	4	0
	福祉金・愛の手帳などの受益に対する抵抗・不満		1	0					0	0	6	0
	園に対しての不満		0	2					0	2	4	0

②	園の選択について意見を聞かせてほしい		2	2						1	1	4		
	教育制度に関して知りたい		0	0					その他1	0	0	6	0	その他1
	幼稚園・保育園の情報が知りたい	9	4	5	0	0	2	3		1	1	0	3	
	その他の通園施設の情報が知りたい		0	1						0	1	5	0	
	収容施設の情報が知りたい		0	2						0	0	6	0	
	園と子どものことについてどう話し合ったらいいか		0	0						1	0	5	0	
	福祉金・愛の手帳などの受益について知りたい		0	0					その他1	0	1	6	0	
③	園へ紹介してほしい	9	3	4	0	0	2	3		0	0	5	1	
	園と子どものことについて話し合ってほしい		0	0						0	0	6	0	
	その他の施設へ紹介してほしい		0	0						0	0	6	0	
	制度の改善に向かって運動する		0	0						0	0	6	0	
G. その他														
①	（マスコミの）情報に接してショックを受け不安になる		1	2						0	1	5	0	
②a	情報に接したがどういう意味かはっきりさせたい		0	2						0	2	4	0	
b	本を貸してほしい（紹介してほしい）		0	2						0	2	4	0	その他1
	発語を促す治療教育をしてほしい		1	1						0	0	5	0	
	母親のカウンセリングを受けたい		0	0						0	0	6	0	
	通所日数を増やしてほしい		4	2						0	0	4	2	
	面接時間を適当な生活時間に合わせてほしい		0	0						0	0	6	0	
	相談料の減額あるいは免除をしてほしい		0	0						0	0	6	0	

第15表

◎ 次の各項目について，現在のあなたの気持に　特にあてはまると思われるところ（はい　いくらか　いいえ —— のいずれかを ◯ で囲んでください。

1. 子どもの発達の遅れに対しての心配	はい	いくらか	いいえ
2. 子どもの行動の意味が理解できないいらだち	はい	いくらか	いいえ
3. 子どもの変化・成長をなかなか認められないあせり	はい	いくらか	いいえ
4. 子どもの将来の不安	はい	いくらか	いいえ
5. 子どもの発達状態について現状を知りたい	はい	いくらか	いいえ
6. 子どもの気持や行動の意味が理解できないので教えて欲しい	はい	いくらか	いいえ
7. 子どもの発達の遅れの原因を知りたい	はい	いくらか	いいえ
8. 子どもの今後の発達の見通しが知りたい	はい	いくらか	いいえ
9. 子どもにどう接したらよいのか分らない，混乱してしまう	はい	いくらか	いいえ
10. 子どもの状態・行動に対するいらだち，腹立ち，怒り	はい	いくらか	いいえ
11. 子どもに適切に接することができない自分への嫌悪感	はい	いくらか	いいえ
12. 子どもを順調に育てられなかったのは自分の育て方のせいかと悩む	はい	いくらか	いいえ
13. この子に合った接し方を知りたい	はい	いくらか	いいえ
14. 父親の非協力に悩む	はい	いくらか	いいえ
15. きょうだいと本児との関係に悩む	はい	いくらか	いいえ

16. 近所の人の無理解・好奇の目などに悩む	はい	いくらか	いいえ
17. 近所の子とうまく遊べないので悩む	はい	いくらか	いいえ
18. 教育・福祉制度を充実してほしい	はい	いくらか	いいえ
19. 教育制度に対する不満	はい	いくらか	いいえ
20. 幼稚園・保育園への入園に対する不安	はい	いくらか	いいえ
21. 園の選択について悩む	はい	いくらか	いいえ
22. 幼稚園・保育園の情報が知りたい	はい	いくらか	いいえ
23. 園への紹介などを相談所で援助してほしい	はい	いくらか	いいえ
24. その他気になっている事がありましたら，うらにお書きください			

て結果(2)の変化に関する考察では，できるだけ両者の一致する部分を中心にすることにした。（表は省略）

(2) 次に，同じく評定A-1，A-2（ニード項目）の変化すなわち面接者による変化の評定（A-1の変化）と母親自身による変化の自己評定（A-2の変化）を各スケール毎に上昇・下降・不変・変動・その他に分けて整理した。その各々の基準は次に示すとおりである。

上昇……上昇のみ，下降なし
下降……下降のみ，上昇なし
不変……上昇・下降ともにないもの
変動……上昇・下降ともにあるもの
その他…不明，明らかな誤記など

結果は第14表右側の相（第4相～第11相）のとおりである。全体的にみて上昇傾向を示した率は極めて少ない。臨床相談過程が問題を解消していく過程だとすれば，ニード評定が下降傾向を示すのは一応もっともなことであろう。そこでA-1，A-2に共通する21項目（第15表にあげたA-チェック項目のうち，No.18，No.20がA-1の示すニュアンスと違いすぎるので除外）について下降得点を吟味した。ここに下降得点とは，その項目に対する下降評定を得た被験者数である。まず，下降得点3以上の項目を「下降項目」とした場合のA-1，A-2の一致率をみると 12/21 となる。次に21項目の中から，A-1，A-2とも下降を示した項目（6例中3例以上が下降を示している項目）をひろい出してみると第16表のようになる。ちなみに，項目の左端にその項目が第Ⅰ部で得られたどの因子に属しているかを示す。これらの下降5項目はすべて第1，3，7因子に属しているのが特徴的である。（ただし4番目は第1因子においてマイナス第3因子に属する2つはともにマイナス）この点をさらに吟味するため，逆に第1，3，7因子の諸項目の評定が各々どのように変化したかを調べると次のようになる。（表略）第1因子については既に前述したように下降項目の1つがマイナス得点を示しているほか6項目までが下降得点0であり，一貫性を示していない。第3因子については，前記2項目がいずれもマイナス項目であり，他はすべて下降得点が低い。つまり第3因子は一貫して下降しにくい項目からなる。このことは後に考察する。第7因子では，最後の項目を除けば下降得点が一貫して高い。（マイナス項目が下降得点が低い。）すなわち第7因子は一貫して下降しやすい。このことも後に考察する。

第16表

属する因子	下降得点	項目
No.3	4	発達の遅れに対する不安
No.1.7	4	子どもの発達状態について現状を知りたい
No.7	3	子どもの気持や行動の意味が理解できないので知りたい
No.1	3	子どもの今後の発達の見通しが知りたい
No.3	3	幼稚園・保育園の情報が知りたい

なお，ちなみに上記3因子以外の第2，4，5，6，8，9因子について同様の検討をした結果は，第8因子においては1つを除いて下降得点すべて0という非下降一貫性がある程度みとめられるが，他はいずれも一貫しないかまたは不明確であった。

(3) 参考までに，母親の態度に関する評定結果（治療者の評定尺度B-1と母親の自己評定B-2）について，変化のみを求めた。結果は第18表のとおりである。

このスケールにおいては下降傾向はあまり認められず，上昇が一般的傾向である。このスケールが一般的治療プロセススケールであることから一応うなづける。そこでB-2がほぼ対応する6個の尺度（B-2のうちB-1に対応していない第7項目を除いたもの）について3例以上が上昇に該当した項目を上昇項目とした。B-1，B-2とも，上昇のもの――2項目，いずれも上昇でないもの――2項目である。ともに上昇をみた2項目からすると，母親は面接過程を通じて協調的になり，子どもへの接し方がわかるようになってきているといってよい。「子どもへの理解」「子ども担当者への信頼」は面接者評定においては上昇しているが，母親は上昇を自覚して

第17—①表

No.	項目		1	2	3	4	5	
(1)	面接場面の様子（どう思っているように見えるか）	つまらない						楽しい
(2)	面接場面における感情表現	表現していない						表現している
(3)	グループの他のメンバーとの協調	非協調的						協調的
(4)	子どもへの接し方	わからない						わかる
(5)	子どもの理解	理解していない						理解している
(6)	母親のセラピストへの感情（子どもを安心して任せられるか）	任せられない						任せられる

第17—②表

No.	項目		1	2	3	4	5	
(1)	あなたは相談室における母親の集まりをどう思いますか	つまらない						楽しい
(2)	この集まりの場で自分の感情を自由に出していると思いますか	出していない						出している
(3)	グループの他の母親に対して自分はどのように接していると思いますか	非協調的						協調的
(4)	あなたは○○ちゃんへの接し方に疑問を感じていますか	感じている						感じていない
(5)	あなたは○○ちゃんを理解していると思いますか	理解していない						理解している
(6)	自分の子どもの担当者に対して安心して子どもを任せられますか	任せられない						任せられる

第18表

項目* No.	面接者の評定 上昇	面接者の評定 不変	面接者の評定 下降	母親自身の評定 上昇	母親自身の評定 不変	母親自身の評定 下降
(1)	2	3	1	1	1	4
(2)	2	1	3	0	1	5
(3)	3	1	2	3	1	2
(4)	4	1	1	3	1	2
(5)	5	1	0	1	1	4
(6)	4	1	1	1	1	4

＊項目は第17—①，②表のもの。

いない。なお面接者評定で最も著しい上昇がみられる「子どもへの働きかけの積極性」「対社会的態度」については，母親の自己評定に含まれていないので結論をさしひかえる。面接場面での積極性・感情表現は，いずれの評定においても上昇がみられないが，これは主として当初から評定点が高かったためとみなされる。しかし全体を通じて例数が少なく，項目間の特徴差について結論的な解釈は下しえない。今後の研究の参考資料とするにとどめる。

4　考　察

結果(3)は参考資料にとどめ，また結果(1)の単純集計に関しては，すでに簡単に考察を述べたので，同じく少数例の予備調査にすぎないが，本研究の問題提起の中核にふれる結果(2)の変化に関する考察を若干述べておきたい。母親の問題意識が全体的に下降することは当然として，第16表にあげられた諸点において特に下降が示されることは，臨床的に，にわかに一義的には解釈しきれないものがある。一方，第Ⅰ部で得られた因子別にみた場

合，第3因子（就園その他に関する不安・不満）が容易に解消しないものであること，逆に第7因子（通園レベルに達していない段階でもっぱら子どものことを知りたいという気持）が時とともに下降していくことが認められた。この両者は第Ⅰ部で考察したように，障害児をもつ母親がかなり現実の就園その他との関係において意識を変化させていく面の重要なことをものがたっている。ただし，これはあくまでも因子レベルにおいて操作的にのみいえることであり，第Ⅰ部で述べた因子の解釈の是非を含めて，例えば「就園問題に関する不安が下降しにくい」というような考察におきかえてしまうことは必ずしもできない。

同じことは，より内面的な意識の変化についてもおそらくいえることであろう。以上の分析結果においては，心理療法で着目されるような内面的変化に関しては不明確な答しか出ていない。しかしこれを若干の項目ないし因子レベルでの分析によって negative な結果だと即断することもできないのであって，若干の項目では positive な結果も暗示されている。

もちろん以上に述べた不明確さは，本研究がなお極めて少数の予備研究段階のものであるという限界，その他方法上の問題に多く起因しているものと思われる。しかし，一方ではケース研究においてかなり明確にとらえられている具体像が統計的操作において相殺されてしまうという方法論上の基本問題も見逃せないのであって，今後ケース研究によってきめ細かなダイナミックスが把握され，その細かなニュアンスを生かすような統計研究法がさらに工夫されていかなければならないであろう。

なお，本研究における因子分析については，佐々木正宏氏の協力を得た。